

## ●「おもちゃ」と人とのかわり

## 手のひらの中にある森

～「東京おもちゃ美術館」の<sup>もくいく</sup>木育推進事業～

NPO 法人日本グッド・Toy委員会 事務局長

ばば きよし  
馬場 清

## ① はじめに

「東京おもちゃ美術館」をご存じでしょうか。

この美術館は、2008年4月、東京都新宿区四谷にオープンしました。もともと小学校だったところを、美術館としてリニューアル。ただし美術館といっても、ガラス越しに貴重な展示品であるおもちゃを鑑賞する・・・といったところではありません。実際におもちゃに触って、遊んで、楽しんで、そして作って、持って帰れる、そんな体験型のミュージアムです。そんな「東京おもちゃ美術館」において、ここ数年、活動の中でも大きな柱に育ちつつあるのが「木育」と呼ばれる取り組みです。

これは「暮らしの中に木を取り入れ、木の持つ力を最大限に生かしながら、赤ちゃんからお年寄りまですべての人の豊かな生活と発達をめざし、そのことで日本の森を元気にし、循環型社会を構築していく取り組み」のことです。

「木育」の活動にもさまざまなものがありますが、私たちは木のおもちゃの持つ可能性を最大限に活用した「木育」を行っています。果たしてどんなことをやっているのでしょうか。

## ② 東京おもちゃ美術館の木育事業

東京おもちゃ美術館は、もともとは東京都中野区にある民間の研究所、芸

術教育研究所の付属施設として1984年に開設されました。「博物館」ではなく、「美術館」としたのは、「アートとしてのおもちゃ」という視点を重視したからです。「もしかしたら人間が初めて出会うアートはおもちゃかもしれない・・・」。そんな想いから「美術館」と名付けました。そして「見る・作る・遊ぶ」の三つの機能を持ちあわせ、「ひとつのおもちゃを大切に、みんなで使う」というコンセプトは、この頃から大切にしてきた想いの一つです。

その後、縁あって、新宿区四谷に移ってきたのが2008年。旧新宿区立四谷第四小学校の一角を借りて、オープンしました。実は私たちが美術館を運営する上で、はじめから「木育」を事業の柱に据えてきたわけではありません。いくつかのきっかけが相重なって「木育」と出会い、その活動がどんどん大きくなっていったのです。

その一つのきっかけが「おもちゃのもり

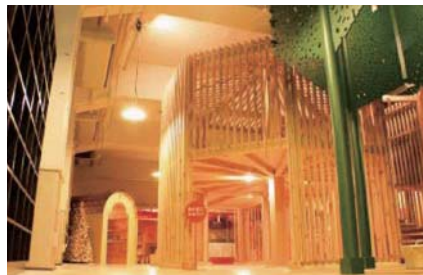


図1：おもちゃのもり

り」という部屋の設置です(図1)。この部屋はともかく国産材をめいっぱい使い、木質感あふれる部屋に設えました。まさしく木を五感で感じながら遊べる部屋が誕生したのです。それ以外でも例えば、美術館のオープンとともに開店したミュージアムショップ「アプティ」には、日本の木のおもちゃ作家のコーナーを設けています。日本の木のおもちゃの品揃えとしては、他にはないほどの売り場となっています。

こうした取り組みが、林野庁の目にとまり、2009年3月には、林野庁長官より感謝状をもらうこととなりました。またこの年の11月に、私たち法人で刊行している『おもちゃで遊ぼう』第12号において「五感を磨き、心と心をつなぐ おもちゃではじめる木育」という特集を組んだことで、木育を推進していくための第一ステップが整うことになりました。そして私たちの木育推進事業が大きく羽ばたいたのは、翌2010年。この年は私たちにとって「木育元年」ともいうべき年になったのです。

例えば「木育キャラバン」という「移動おもちゃ美術館事業」を始めました。24個の大きなボックスに詰め込まれた木のおもちゃが日本各地に運ばれ、小学校の体育館ほどのスペースを埋め尽くします。今では年間10~15カ所ほどの開催を誇っています。そしてどの会場からも子どもや大人の歓声が響いてきます。

また子ども向けの木育プログラムの開発も行っています。初年度は、夏プログラム(水の積み木づくり)と冬プ

ログラム(光の積み木づくり)の2つの季節に合わせた木育プログラムを開発し、実際に岐阜県美濃市にある2つの保育園において年少児に実施しました。そして3年目となる2012年に、そのまま年長になった子どもたちは、自分と来年入園してくる後輩のために、のこぎりやかなづちを使って、「スギの箱イスづくり」に励みました。工具の使いっぷりもさることながら、集中して一つのことに取り組む姿勢、そして暮らしの中に木が普通に取り入れられていくようになったことなど、木育の真髄を知る取り組みとなりました。

また公募によって選ばれた団体・個人に木のおもちゃセットを配布する事業「全国赤ちゃん木育広場・木育寺子屋」も行いました。このうち「赤ちゃん木育広場」は、赤ちゃん向けの厳選された木のおもちゃが入っている「赤ちゃん木育おもちゃセット」を使って、地域の赤ちゃんたちを集めて、子育て支援活動を行うものです。また「赤ちゃん木育寺子屋」は事前研修を受けた各団体・個人の代表者が、地域の保護者向けにテキスト(『木育おもちゃで安心子育て』黎明書房刊)とおもちゃを使って、木育の意義を伝えるというものです。3年間で計100カ所。地域の親子が、身近なところで木のおもちゃと触れあいながら、木育の意義を感じることができる拠点となっています。

さらに全国各地から集められた子ども向けの木製品、たとえば木のおもちゃ、家具、食器などが一堂に会して行われる大見本市「森のめぐみの子

も博」を、東京おもちゃ美術館のある四谷ひろば講堂で開催しました(図2)。北海道、青森県、長野県、岐阜県、宮崎県などの木工職人によってつくられた子ども向け木製品が並べられ、会場となった講堂は「森のめぐみ」で埋め尽くされました。木育のパネル展示などもあり、来場者に向けて木製品と森のつながりについてメッセージを伝える貴重な機会となっています。この取り組みも2012年で3回目を迎え、回を重ねるごとに、入場者数も出品数も増えてきています。



図2：森のめぐみの子ども博

### 3 全国に広がる「ウッドスタート」って何？

さらには、上記の事業とは別に、2011年度からスタートしている取り組みもあります。「ウッドスタート」と呼ばれるものです。「ウッド」で「スタート」っていったいどういうことでしょうか？

これには大きく二つのかたちがあります。一つは誕生祝い品として木のおもちゃをプレゼントする事業です。日本で最初に始まったのが私たちのお膝元・新宿区。新宿区では毎年2,000人以

上の赤ちゃんが誕生しているのですが、その赤ちゃんに友好提携都市である長野県伊那市の材を使った木のおもちゃをプレゼントしています(図3)。「赤ちゃんのファーストイは地産地消のおもちゃから!」。これがウッドスタートのコンセプトです。国産材を使った木のおもちゃの消費量を増やすことで、日本の森と林業と、そして匠の技をもった職人さんたちの応援団になろう!そんな気持ちをこめて始めました。この動きは全国的な広がりを見せ、すでに長野県伊那市、岐阜県美濃市などでも始まり、2013年度には、福島県飯館村、神奈川県小田原市、熊本県小国町、沖縄県国頭村などでもスタートできるように準備が進められています。

ウッドスタートのもう一つのかたち。それは子育てで支援施設の木育化です。私たちはそのモデルともいえるべき部屋を東京おもちゃ美術館内に作りました。0~2歳までの赤ちゃん専用の「赤ちゃん木育ひろば」(図4)がそれです。スギのトンネルをくぐって部屋に入ると、ふうんとスギの香りが漂ってきます。床には厚さ30mmの東京多摩産のスギ材が敷き詰められているので



図3：ウッドスタートおもちゃ「モグラと野菜畑」

す。それ以外にもスギのベンチ、テーブル、おもちゃなど、全国の10地区から集められたスギで埋め尽くされた木質感あふれるスペースです。樹齢100年を超えるスギでつくられた「すべり台」、「トンネル」、「マウンテン」、「座布団」は、九州産のスギを使用しています。さらには北山杉でつくったおもちゃ職人中山カズトさんの「くるりんカー」、岐阜県からは10種の材でつくった積み木が届けられるなど、日本各地の「森のめぐみ」が赤ちゃんを出迎えてくれます。毎日さまざまなドラマが生み出されていますが、「ここに来るとうちの子泣かないんです」、「木のおもちゃってなかなか買えないから、本当にうれしいです」、「ここで遊んだ後、家に帰るとぐっすり眠るんです」などなど、利用された皆さんからの喜びの声が聞こえてきます。この部屋で出会ったママ友と子育ての悩みを語り合ったり、子育ての先輩であるボランティアの方々からアドバイスを受けて、さらには男の人にとってもハードルが低いのか、似たような子育て支援施設に比べ、パパの利用率が高いのも特徴です。こうした部屋やスペースを全国各地に作ら



図4：赤ちゃん木育ひろば

い！そんな私たちの想いを受けて、全国の自治体や企業が動き出しはじまりました。もうすぐ皆さんの身近なところにもできるかもしれません。

#### ④「木のおもちゃ」が果たす役割

ここまで紹介してきた私たちが行っている木育事業は、大きく二つの目的をもっています。一つは木の持つ特質を活かして、子どもたちの豊かな発達や大人への癒し効果を保障していくこと。まさに「木で育む」木育です。もう一つは木や森に関心を持ち、循環型社会の構築に向けて、果たすべき役割を自ら考え、実践する市民に育ってもらうこと。こちらは「木を育てる」木育です。

これまでに紹介したさまざまな取り組みも基本的にはこの両者の目的を常に意識しながら推進してきています。そしてともかく木のおもちゃと接する機会をできるだけ多く増やし、一人でも多くの木のファンを育てることを目指しています。そして暮らしに木を取り入れるだけでなく、そこから木や森に関心をもってもらうような働きかけができればと思っています。

たとえば、木育キャラバンでは、木のおもちゃと思う存分遊んでもらうことを根本に据えながら、森に関心をもってもらうために、木育に関するパネルを制作して、情報を伝達する機会をもっています。またこうして木のおもちゃで楽しく遊ぶだけでなく、木や森に関心を持ってもらうことで、次のステップとして「木を暮らしに取り入れる」段階になることを願っているの

です。ただ当然のことながら、そう簡単にはいきません。「木製品はいいんだけど、やっぱり高いよね」。これが普通の方の反応だと思います。とはいえ私たちが新宿区で始めたウッドスタートにおいて、木のおもちゃをプレゼントした保護者向けに行ったアンケートでは、「誕生祝いの品をいただき、ありがとうございます。とても木のぬくもりを感じるやさしい手触りで感激しました。大人が見ても素敵なデザインで、子どもと遊べる日が待ち遠しいです。日本の木のことも勉強になりました」という声も聞かれています。また「今後、木製品を暮らしに取り入れようと思われましたか」という問いについては、8割を超える人が「大いに取り入れたい」「取り入れたい」と答えており、木のおもちゃとの出会いが、木を暮らしに取り入れるきっかけになることがわかってきています。

もちろん木のおもちゃで遊んだからといって、それがすぐに森林整備や循環型社会の構築に直接的につながるというわけではありません。ただ「木のおもちゃ」という子どもにとっても、もちろん大人や高齢の方にとっても身近で扱いやすいところからスタートして、木に関心を持ち、森に関心をもつようになる。私たちの取り組みが、そんなきっかけづくりになることを願っています。

## ⑤ おわりに

私たちは木のおもちゃのことを「手のひらの中にある森」と名付けています。そしてことあるごとに元々は生き

ていた樹木（ツリー）だったことを子どもたちに意識してもらうように声かけを行っています。そして木の特性を知ってもらうためにも、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感で木のおもちゃを感じ、楽しんでもらえるように働きかけています。同じ材でつくられたおもちゃでも、木目は異なり、一つとして同じものはないこと。同じような色、同じような木目であっても、実際持ってみると、樹種が異なると全然重さが違ってくこと。音を聞いてみると、固さの違いで音が変わること。匂いを嗅いでみると、木の種類によって、さまざまな香りがすること。などなど、木のおもちゃで遊ぶと、木の多様性に気づくことができます。そんなところから木や森に関心をもつ人が増え、適切に木を消費することが、実は森を守り、その結果として、私たちの生活に必要な水源としての役割を果たすこと、土砂崩れや土石流などの災害から私たちを守ってくれること、微生物からは乳類まで多種多様の生き物たちが生存できる環境になっていくことなど、森林のもつ多面的機能が発揮されることにつながるということを知ってもらいたいです。

これこそが私たちが目指す木育のひとつの大きな目標であり、木のおもちゃで遊ぶことが、循環型社会構築への第一歩と考える理由なのです。

（廃棄物資源循環学会誌Vol.23, No.3, PP.190-197 (2012) に関連記事掲載）